

第96回三方限古典塾（'14, 10, 16）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3-13）

- 1 声妓も晩景に良に従わば、一世の烟花も碍無し。貞婦も白頭に守りを失わば、半生の清苦は俱に非なり。語に云う、「人を看るには、只後の半截を看よ」と。真に名言なり。
前集 93

（意識） 芸妓でも、晩年に身を固めて夫によく仕えたならば、若い頃の花やいだ暮らしも一向に妨げにはならない。それに対し、貞節な婦人であっても白髪になって操を守ることができないと、それまでの清い半生の苦勞が無になる。俗諺にも「人の一生を評価するには、ただ後の半生を見るだけでよい」と言っている。けだし名言である。

（余説） 若い頃には多くの人が無らかなの過ちを犯すことがあるのではないのでしょうか。しかし、人生も後半になってからの過ちは、なかなかやり直しは難しいと思われま。また、第一線を退いた後の第二の人生をいかに過ごすのかについて誰もが重要です。特に活躍の寿命が短いプロスポーツ選手などにとっては尚更のことでしょう。

「棺を蓋いて事定まる」（晋書）とも言います。死んでこの世を去った後に初めてその人の真価が定まるのであれば、後半生はもちろん最後の一瞬まで大事です。とすれば、今からでも遅くはありません。残された人生を誠実に前向きに生き、晩節を全うすることこそがその人生を豊かにするのです。頑張りましょう。皆さん！

- 2 祖宗の徳沢を問わば、吾が身の享くる所の者是れなり。当に其の積累の難きを念うべし。子孫の福祉を問わば、吾が身の貽す所の者是れなり。其の傾覆の易きを思わんことを要す。
前集 95

（意識） 祖先が残してくれた恩恵は何か。それは、今自分が享受している幸福である。祖先が長年に亘って困難な苦勞を積み重ねてきたことに感謝しなければならない。

子孫に残そうとする幸福は何か。それは、現在の自分が積み重ねている努力によってもたらせるものだ。それは崩れることも早いことを念頭においておくべきである。

（余説） 「自業自得」「因果応報」は仏教の言葉です。自らつくった善悪の業の報いを自分で受けることで、あくまで個人が基本です。これに対して儒教では「積善の家には必ず余慶あり。積不善の家には必ず余殃あり」（易経）と家が基本になります。殃とは災いです。わが国には「親の因果が子に報い」との俗諺もあり、ここで菜根譚が教えるのも家が基本の儒教的です。あなたにとっては、どちらが分かりやすいでしょうか。

「福祉」の福・祉共に「さいわい・しあわせ」という意味です。西郷南洲は「児孫の為に美田を買わず」と書き残しましたが、子孫の幸福を願いながら具体的に何を残せるのか悩ましいところです。確かに、何れも崩れやすいものが多いですね。

（参考）西郷南洲・感懐「幾歴辛酸志始堅 丈夫玉碎愧輒全
一家遺事人知否 不為児孫買美田」
（幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し、丈夫玉碎して輒全を愧ず
一家の遺事人知るや否や、児孫の為に美田を買わず）

3 家人に^{あやまち}過あらば、宜しく^{ぼうど}暴怒すべからず。宜しく^{けいき}軽棄すべからず。此の事言い難くば、他の事を借りて^{いん}隱に之を^{いさ}諷め、^{ごんにち}今日悟らざれば、^{らいじつ}来日を俟ちて^ま再び之を^{いまし}警めよ。春風の凍れるを解くが如く、和気の氷を消すが如くす。纔かに是れ家庭の型範なり。 前集 97

(意識) 家族の者に過ちがあつたら、むやみに激しく叱らないほうがよい。さりとして軽々しく見逃していけない。もしそれが直接に言いにくい事ならば、他の事にかこつけてそれとなくたしなめる。それで効果がなければ、他日を待って再び注意する。春風が凍りついた大地を解かし、暖気が氷を解かすようにするのが家庭の和を保つ秘訣である。

(余説) 大学八条目「格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治国・平天下」で、^{とどの}家を齊えることは国を治める前提です。中村天風が言う「家庭とは神が定めた自己修養の場だ」とのとおりに、家族を叱るのは学校や職場で生徒や部下を叱るより難しいものです。野球の野村克也さんは、叱る基準がはっきりしていることが大切だと書いています。

諷めとは、それとなくたしなめ、穏やかな言葉で相手の心に訴えること。これに対して強い態度で直接注意するのは「諫め」、死をもって主君を諫めるのは^{しかん}死諫です。

また兵法に「指桑罵槐」(桑を指さして^{えんじゆ}槐を罵る)があり、第三者を怒鳴りつけ間接的に相手を批判することで、叱ることは左様に難しいものです。さらに「叱る」と「怒る」の区別も弁える必要があります。かつてわたしは部下に対しては「誉めることは間接的に、叱ることは直接に」を心がけていましたが、どんなものでしょうか。

4 人心の^{いっしん}一眞は、^{すなわ}便ち霜をも飛ばすべく、城をも^{おと}隕すべく、^{きんせき}金石をも貫くべし。^{めんもく}偽妄の人の^{ごと}若きは、形骸の^{いたすら}徒に具わるも、^{しんさい}真宰は已に亡ぶ。人に対せば則ち^{めんもく}面目は憎むべく、^お独り居らば則ち^{けいせい}形影は自ら^ほ媿ず。 前集 102

(意識) 人間の真心から発する一念は、夏の夜に霜を降らせ、堅固な城壁を崩し、矢じりを金や石に突き通すことができる。これに対して、うそ偽りの多い人は、肉体は一応備わっていても、人としての本心はすでに失われている。だから、人に向かう時には顔形まで憎らしくなり、一人でいる時には自分でも自己嫌悪に陥るに違いない。

(余説) この話は、戦国斉の陰陽五行思想の^{すうえん}大家鄒衍、^{きりよう}春秋斉の武將杞梁の妻、漢代の將軍で射術の名人^{りこう}李広の故事からです。「一念^{いっお}巖をも徹す」が残っています。

朱子語類に「陽気の発する處、金石もまた透る。精神一到何事か成らざらん」とあります。因みに、薩摩川内市の陽成小学校校名の由来はここだそうです。白鳳が横綱昇進で述べた口上も「精神一到」でした。真心をもって一筋に思い続ける人と、うそ偽りの心で他者に接する人との表情には大きい隔りがあるように感じられます。

竹内一原著「人は見た目が9割」(新潮選書)には「話す言葉は7%の内容しか伝えない。残りの93%は顔の表情や声の質、身だしなみや仕草などが大きく影響する」とあります。採用試験の面接の光景を思い出します。

数年前にテレビの公共広告で、宮澤章二さんの詩「行為の意味」が放送されました。

〈ころろ〉はだれにも見えない けれど〈ころろづかい〉は見える

胸の中の〈思い〉は見えない けれど〈思いやり〉はだれにでも見える

それは人に対する積極的な行為だから (一部) も心に残っています。